

「報道写真」

2015年09月28日

報道写真家の福島菊次郎氏が94歳で亡くなりました。福島氏は権力に翻弄される民衆の壮絶な写真を撮り続けた。その反骨精神は二等兵として召集され殴られ続けた階級社会、そして、宮崎で米軍の戦車に爆雷を背負って迎え撃つ「自爆」を命じられた戦争体験から生み出されている。私の所には今、13冊の写真集の中の、自らが「遺作」という『証言と遺言』しかないが、福島氏の権力に抗う迫りに圧倒される。

「すべての同志にむけて」で下記のように書いている。「一枚の写真にも命がある。一度使えば用済みになる写真はそれだけの命しかない。だが、百年前の写真でも見る者の心に衝撃を与えることがある。『死なない写真』を撮らなければならない。そのためにカメラマンは歴史認識に支えられた撮影者としての基盤を持ち、状況の渦中に飛び込み、問題が続く限りシャッターを切り続け、発表しつづけなければならない。『一枚の写真が国家を動かす』。それは人間の尊厳を守るために、権力に迎合せずシャッターを切り続けるカメラマンだけに与えられた特権である。」

福島氏は「草木も生えぬ」と言われた広島原爆ドームの瓦礫から、草の芽が出ている写真を見て、写真を撮り始めた。その頃に、被爆した中村杉松氏と出会ったことが写真家としての原点になった。中村氏は妻を失い、自らも原爆症で痛み、苦しみ、極貧の生活をしてきた。彼から「ピカにやられてこのザマじゃ、口惜しうて死んでも死に切れん、あんた、わしの仇をとってくれんか」と言われ、「どうして仇をとればいいのですか」と問うと「わしの写真を撮ってみんなに見てもらってくれ。ピカに遭うた者がどんなに苦しんでいるか分かってもらうたら成仏できる。頼みます」と答えた。しかし、あまりに悲惨な状態にカメラを向けることができなかったが、「遠慮はいらん、何でもみんな写して世界中の人にってもらってくださいや」と言われ、写真を撮り始め、最初の写真集を出版した。その撮影のストレスで精神病院に入院したという。写真は被写体を客体化することであるが、福島氏は被写体と一体化してしまったのであろう。

写真家の広河隆一氏はあとがきで、福島氏を「『国家の暴力や不正を監視、告発するのがジャーナリストの使命である』という信念を臍腑に刻み、その原点を揺るがぬものとするが、『僕はいつも自分の仕事に怯えてシャッターを切り続けた』とも独白する」と書いている。福島氏は震えながら被写体に向かったのである。

ベトナム戦争には多くの従軍カメラマンが同行し、戦禍の状態を報道した。町中で、手を縛られた若者が米兵にピストルで頭を撃たれ、倒れ込む写真は衝撃的だった。ピューリッツァー賞を取った沢田教一氏の母と子どもたちが必死の形相で、川の中を逃げまどう写真は忘れることができない。これらの報道写真がベトナム反戦運動に広がっていった。アフガニスタン、イラク戦争の場合は、米国はベトナム戦争に懲りて、従軍カメラマンを著しく制限した。権力の横暴は報道を規制することから始まる。

沖縄戦を再見するため米軍が写したフィルムの「1 フィート買い取り運動」を起こし、沖縄戦の惨劇の映像を観ることができた。沖縄の平良修牧師は「あれは勝者の側が作ったフィルムである」と、映像はどの視点で見ると言っている。私は爆撃されたアフガニスタン、イラク側から撮った写真を見たいと思っている。そうすれば、米国中心の多国籍軍の人間無視の実態が見えるに違いない。報道写真は大きなインパクトを与えるが、どの視点から、どう被写体と一体化したかが問われる。